八重の生きた

時代

読まんしょコラム②

会津の女は強い!!

自らの行動と意志を貫き「鹿鳴館（ろくめいかん）の貴婦人」に

文明開化の象徴ともいわれた「鹿鳴館」。毎晩のように海外の賓客を招いて、舞踏会が開催されていた。その中に、ひときわ注目を集める女性がいた。彼女の名は大山捨松（おおやますてまつ）（旧姓・山川）。彼女も新島八重と同じく、不屈の精神で人生を切り開いた会津の女性だった。

万延元（まんえん）（1860）年、捨松は会津藩家老・山川尚江の五女に生まれた。兄は、東京大学総長となった山川健次郎。8歳で籠城戦を経験し、戊辰戦争後は函館に預けられた。

1度目のターニングポイントは、彼女が12歳だった明治4（1871）年。政府が派遣する、日本最初の女子留学生に選ばれ、アメリカに渡ることになったのだ。幼くして家族と離れ、遠い外国で暮らすのは、どんなに心細かったことだろう。しかし捨松は、このチャンスを無駄にはせず、よく学び、ヒルハウス高校を卒業して、ヴァッサー大学に進学。才色兼備の彼女は、学年会会長に選ばれるほどの人気者だった。

その11年後、捨松は帰国。彼女は大歓迎されると予想していたが、実際はそうではなかった。男尊女卑の風潮が残る当時の日本には、留学した彼女に与えるような仕事がなかったのである。アメリカでの充実した生活とはうって変わって、失意の日々が待っていた。

それから約1年後、2度目のターニングポイント。陸軍大臣・大山巌（おおやまいわお）に見初められ、求婚されたのだ。しかし、捨松の家族は猛反対した。巌は元・薩摩藩士で、会津攻めの砲隊長として、小田山から鶴ヶ城を砲撃した人物だった。山川家はきっぱりと断ったが、巌はあきらめない。熱心な巌の姿に、山川家では「捨松が承諾すれば結婚を許す」と答えた。捨松は「相手を知った上で返事がしたい」とデートを重ね、次第に巌の人柄に惹かれるようになり、結婚を決意する。親が結婚を決めていた時代に、捨松は、人生の伴侶を自ら選んだのだ。

政府高官の妻となった捨松は、明治の社交界で活躍した。鹿鳴館では、日本の貴婦人たちに西洋式の礼儀作法を教え、アメリカ仕込みのステップと流暢な英語で人々を魅了。「鹿鳴館の貴婦人」ともよばれた。留学で身に着けた、教養と語学力が実を結んだのである。

八重の生きた「時代」

新島八重が歩んだ「江戸」「明治」「大正」「昭和」という時代。
彼女が生きたのは、どのような時代だったのでしょうか。

江戸時代末期

黒船来航と徳川幕府の最期 そして戊辰戦争へ

ペリー率いる黒船の来航以降、列強による開国要求が相次ぎ、国内は混乱します。そんな中、薩摩・長州藩を中心とする反徳川派は大政奉還を実現させて、政権は天皇へ。しかし朝廷内では、依然として緊張状態が続いていました。その矢先に始まった鳥羽・伏見の戦いがきっかけとなり、戊辰戦争へと発展していきます。会津若松はもちろん、福島県内全域に戦火が及びました。八重が生まれ、幼少期を過ごしていた頃は、日本が新たな時代を迎えようとする「転換期」でした。

明治時代

政府による制度改革と 文明開化による欧風化

戊辰戦争が終結し、本格的に明治時代がスタート。版籍奉還や廃藩置県、地租開催など、明治政府はさまざまな制度改革を行います。また文明開化による欧風化、開国直後から行ってきた近代化を、さらに進めていきました。廃藩置県が行われた明治4（1871）年、八重は京都府顧問を務める兄・覚馬を頼って京都へ。そこで襄と出会い、結婚します。その後、八重は最愛の夫である襄と死別してしまいますが、日清・日露両戦争では、篤志（とくし）看護婦として傷病者の手当てをしました。

大正・昭和時代初期

第一次世界大戦による好景気 戦後は一転して不景気に

この時期の最大の出来事は、大正3（1914）年に勃発した第一次世界大戦。これにより、日本経済は空前の好景気になります。しかし4年後、終戦を迎えると景気は一気に悪化。さらに関東大震災、昭和初期の金融恐慌や世界恐慌の余波で、街は失業者であふれました。八重は晩年、茶道の師範代となり、大正時代には自宅の一部を改装して、茶室を造ります。また亡くなる前年、会津若松市にある大龍寺（山本家の菩提寺）に山本家の墓を建てました。

和装の八重
写真提供／同志社大学

優雅で厳かな「佇まい」

訪れる人を魅了する 優雅で厳かな「佇まい」

八重が会津で暮らしていたのは、今から約150年前。当時はもちろん、それ以前に誕生した建造物や景勝地が、福島にはたくさんあります。そのすべてに共通しているのは、まるで時間が止まったかのような優雅で厳かな「佇まい」。今も昔も変わることなく、訪れる人々を魅了し続けているのです。

【天鏡閣】
美しい風景に魅せられた有栖川宮威仁親王殿下が1908（明治41）年に建てた洋館

【達沢不動滝】
安達太良山系船明神山に源を持つ不動川の名瀑。新緑と紅葉の時期は、多くの見物客が訪れる

愛され続ける「味」

時代が移り変わっても 愛され続ける「味」

ファーストフードなどに代表されるようにおいしいものが簡単に、しかも安く手に入る現代。いつの時代も、美味なる味は人々の胃袋と心を満たしてくれます。その多くは、一過性のものに過ぎません。時代が移り、食事のスタイルが変わっても、人々に愛され続ける「味」が、福島にはあるのです。

【しんごろう】
半つきにした米にじゅうねん味噌を塗って囲炉裏で焼いた、南会津町や下郷町の郷土料理

【油揚げほうろく焼】
三春町の名物「三角油揚げ」。三春藩3代藩主・秋田輝季（てるすえ）も口にしたという逸品

受け継がれる「伝統」

先人からの素敵な贈り物 受け継がれる「伝統」

親から子、子から孫へ。いいものは、世代を超えて受け継がれていきます。「祭事」「芸能」「工芸」。種類こそ異なるものの、それは現代の私たちに届けられた、先人からの素敵な贈り物。長い年月を経て受け継がれてきたものすべてが、色あせることのない魅力であふれているのです。

【会津絵ろうそく】
会津を代表する伝統工芸品のひとつ。江戸時代、参勤交代の際の献上品にもなっていた

【白河だるま市】
白河地方に春の到来を告げる伝統行事。毎年2月11日に開催され、15万人もの人でにぎわう

会　津

会津武家屋敷

会津若松市

会津武家屋敷
☎0242(28)2525

会津の歴史に触れられるミュージアムパーク

会津の歴史や文化、精神を後世に伝えるため、地元の有志が戊辰戦争で焼失した建物などを再現した施設。会津藩家老・西郷頼母（たのも）邸を中心に、旧中畑陣屋、藩米精米所、会津歴史資料館などの建造物が建ち並びます。

中でも38もの部屋がある西郷頼母邸は、当時の「家老屋敷」を忠実に再現。屋敷内には、戊辰戦争の際、頼母の妻である千重子が夫の入城を見送った後、そこに居合わせた家族や親戚21人と自刃したシーンなどを再現しています。

ほかにも、頼母の養子で小説「姿三四郎」のモデルになった西郷四郎像、坂本竜馬を斬ったといわれる京都見廻組組頭・佐々木只三郎の墓などがあります。さらに、会津の名品が並ぶ売店、会津の郷土料理を食べることができるレストランも併設。江戸幕末の会津の歴史・文化を感じることのできるミュージアムパークです。

西郷家は、会津藩で代々家老職を務めた名門で、幕末期の当主が頼母だった

会　津

さざえ堂

会津若松市

有限会社 山主飯盛本店
☎0242(22)3163

極楽浄土を願う人々の心が生み出した世界的にも珍しい建造物

寛政8（1796）年に飯盛山に建立された高さ16・5m、六角三層のお堂。正式名称は「円通三匝堂（えんつうさんそうどう）」といい、正宗寺の住職であった郁堂（いくどう）が考案しました。独特な二重らせん状のスロープは、上りと下りの通路が別になっていて、すれ違うことなく参拝することができます。世界的にも珍しいこの建築様式が認められ、平成8（1996）年、国の重要文化財に指定されました。

建立当初は、内部に三十三観音が祭られていて、お堂を一周すると西国三十三観音札所を巡礼したのと同じような御利益があるとされていました。しかし明治になると、正宗寺は寺を廃止して神道を信仰したため、観音像は取り外されてしまいました。現在は、第8代藩主の松平容敬（かたたか）が編纂した『皇朝（こうちょう）二十四孝（にじゅうしこう）（会津藩の道徳の教科書）』の絵額が掲げられています。

二重らせん状のスロープ。建物の構造が巻き貝に似ていることから「さざえ堂」とよばれるようになった

会　津

大内宿

下郷町

大内宿観光協会
☎0241(68)3611

集落全体に今もなお残る江戸時代の宿場町の面影

江戸時代、会津若松と日光・今市（ともに栃木県）を結んだ下野街道の宿場町。参勤交代の大名行列や旅人、江戸への米の輸送など、多くの人や物資が行きかい、にぎわいました。下野（しもつけ）街道は、当時会津藩と友好関係にあった米沢藩（山形県）や新発田藩（新潟県）の人々も利用するなど、重要な路線のひとつでした。

旧街道沿いには、約40軒もの茅葺き屋根の家々が整然と軒を連ね、今もなお当時の面影を残しています。主屋の多くが建てられたのは、江戸時代後期から明治時代にかけて。新島八重が生まれたのは江戸時代末期の弘化2（1845）年なので、彼女が生まれた頃の建物が、当時のままの姿で現在まで残されていることになります。昭和56（1981）年には、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

旧街道沿いにある大鳥居。ここから西へと向かうと、付近一帯の鎮守・高倉神社がある。毎年7月2日には「半夏まつり」が開催される

会　津

新宮熊野神社

喜多方市

新宮熊野神社保存会
長床事務所
☎0241(23)0775

荘厳な雰囲気が漂う「長床」と「大イチョウ」は必見

奈良、京都に次いで、寺社仏閣が数多く残るエリアであり、いにしえの歴史と文化が今もなお色濃く残る会津地方。その中の一都市・喜多方市にある新宮熊野神社は、古来から日本の聖地のひとつとされる熊野三山を祭っていて、修験道の修業の地でもありました。また鎌倉時代には、会津盆地西部一帯を治めた新宮氏の守護神とされ、繁栄しました。その後、会津葦名氏と新宮氏の戦いなどに巻き込まれ、時代と共に神社も衰退していきますが、江戸時代になり、会津蒲生家により拝殿（長床）が建立。そして保科正之以降は、会津松平氏の祈願所とされました。

拝殿として建てられた「長床」は、直径1尺5寸（約45㎝）の円柱44本が5列、10尺（303㎝）の等間隔に並び、内部は仕切りや建具のない吹き抜け構造の壮大な建物。国の重要文化財に指定されています。長床前には樹齢約800年ともいわれる大イチョウがあり、秋は黄金の絨毯を敷き詰めたように、辺り一面を華麗に染め上げます。

市の天然記念物にもなっている「大イチョウ」

浜通り

白水阿弥陀堂

いわき市

願成寺 白水阿弥陀堂
☎0246(26)7008

お堂と浄土式庭園の造形美
平安の世に思いを馳せる

平安後期の代表的な建物で、福島県の建造物で唯一国宝に指定されています。言い伝えによると、永暦元(1160)年、藤原清衛(きよひら)の娘で岩城則道の妻である徳尼が、夫の供養のために建立したものだといわれています。

優雅な平安時代の姿を残す四方に流れた柿葺(こけらぶき)の屋根。そして堂内には、国の重要文化財である「本尊阿弥陀如来」「観世音菩薩立像」「勢至菩薩立像」「持国天王立像」「多聞天王立像」が保存されています。

また、浄土式庭園と周囲の自然とのコントラストは必見。夏はアヤメと古代ハス、秋は色鮮やかな紅葉、冬は雪化粧をした幻想的な風景と、四季折々の美しい表情を楽しむことができます。

朱塗りの橋の向こうには、阿弥陀堂が。国宝と呼ぶにふさわしい荘厳さが漂う

会 津

福島県立博物館

会津若松市

福島県立博物館
☎0242(28)6000

アームストロング砲(模型)福島県立博物館展示

福島県の歴史を知る上で
欠かせないスポット

会津若松市のシンボル・鶴ヶ城の東側にある総合博物館。福島県の歴史を知る上で欠かすことのできないスポットで、会津の歴史をじかに感じることができます。館内では、福島県に人類が住み始めた旧石器時代から日本の基礎を支えた近代まで、幅広くそして分かりやすく見学できます。新島八重が生きた幕末・明治・昭和はもちろん、それ以前の時代のこと、そして戊辰戦争後の福島の様子も、楽しみながら学ぶことができます。

中でも、近・現代のブースには戊辰戦争でも使用された「ゲベール銃」「ミニエー銃」、さらに新政府軍が鶴ヶ城に数千発も放った「アームストロング砲」を復元展示。目の前で見るアームストロング砲は、迫力満点です。ほかにも、豊富に展示されている貴重な資料に加えて、昔のおもちゃ、時代衣装、手で触れるコーナーなどの『体験学習室』も充実しています。

戊辰戦争の展示コーナー
福島県立博物館展示

地元・会津若松を舞台に繰り広げられた戊辰戦争に関する貴重な資料も、豊富に展示している

会 津

東山温泉

会津若松市

会津東山温泉観光協会
☎0242(27)7051

偉人にも愛された
会津若松の奥座敷

開湯から約1300年もの歴史を誇る名湯で、上山温泉、湯野浜温泉(ともに山形県)と並んで「奥羽三楽郷」のひとつに数えられています。会津若松市の中心部から車で10分程度、飯盛山などの観光地にも近いこともあり、多くの観光客が訪れる人気の温泉です。

名僧・行基によって発見されたといわれていて、彼が会津を訪れた際、どこからか不思議な羽を持つ3本足の「烏」が現れます。ついていくと、その先には湯気が立ち上っていたといいます。

江戸時代には会津藩の湯治場として栄え「会津若松の奥座敷」として発展しました。会津藩松平家の別荘から発祥した宿、会津藩指定保養所の歴史を持つ宿、新選組副長の土方歳三(ひじかた)が傷を癒した源泉を持つ宿など、会津の歴史とかかわりの深い温泉宿が数多くあります。また、歌人の与謝野晶子も足を運ぶなど、偉人にも愛されています。

川のせせらぎに耳を傾けながら風情ある町並みを眺めるのも、歴史ある温泉ならではの魅力

会 津

向羽黒山城跡

会津美里町

会津美里町観光協会
☎0242(56)4882

葦名盛氏が築いた
東北地方有数の山城

400年もの長きに渡り、会津を支配してきた葦名氏。その16代・盛氏は、黒川城(後の鶴ヶ城)を居城としていましたが、永禄4(1561)年、白鳳三山の最高峰である岩崎山に築城を開始。永禄11(1568)年に「向羽黒山城」が完成しました。この名前は、岩崎山が別名「向羽黒山」とよばれていたことに由来。上杉謙信の居城であった春日山城を凌ぐといわれていて、東北地方でも有数の山城として知られています。

葦名氏滅亡後も伊達氏、蒲生氏、上杉氏の攻撃的城として機能してきましたが、慶長6(1601)年、関ヶ原の戦いでの上杉軍の敗戦に伴い、廃城になったといわれています。曲輪、虎口、土塁、切堀、石垣など、中世城郭を知る遺構が非常に良い状況で残されています。2001(平成13)年には、国の史跡に指定されました。

二の丸跡からの眺め。空気の澄んでいる日は会津平野はもちろん、磐梯山を望むことができる

会　津

塔のへつり

下郷町

下郷町役場 事業課
産業振興班 商工観光係
☎0241(69)1144

長い歳月を経て生まれた大自然の造形美

県内最大の面積を誇る自然公園「大川羽鳥県立公園」内を流れる大川沿いの景勝地。凝灰岩や凝灰岩質の砂岩の地層が100万年もの歳月をかけて浸食と風化を繰り返し、さまざまな奇岩と怪岩が生み出されました。渓谷沿いには10の塔の形をした奇岩があり、「鷲塔岩」「鷹塔岩」「獅子塔岩」「屋形塔岩」「櫓塔岩」「九輪塔岩」「象塔岩」「護摩塔岩」「烏帽子岩」「屏風塔岩」とそれぞれ名前がつけられています。

春は新緑、夏は深緑、秋は色鮮やかな紅葉、冬は雪景色と、一年を通して岩肌と四季折々の自然との美しいコントラストを楽しむことができます。「へつり」とは、この地方の方言で「険しい断崖」の意味。人の力では到底造りえない大自然の造形美は、昭和18(1943)年、国の天然記念物に指定されました。

自らの葉を、思い思いの色に染め上げる渓谷沿いの木々。さらに寒暖の差が増してくると、葉の色は言葉を失ってしまうほどの美しさへと変わっていく

中通り

南湖公園

白河市

白河観光物産協会
☎0248(22)1147

今も昔も変わらない庶民の憩いの場

享和元(1801)年、白河藩主・松平定信によって築造された庭園。定信は、身分を越えて、この公園が全ての人々の憩いの場となるよう「士民共楽」という思想を掲げます。そして茶室「共楽亭」を建て、士民と楽しみを共にしました。一般的な「公園」として開放されたものとしては日本最古といわれています。大正13(1924)年には、国の史跡および名勝に指定されました。園内の湖を囲む松・桜・楓は、四季折々の美しい姿で訪れる人々を魅了しています。

名物は「南湖だんご」。その歴史は古く、造園に携わった職人に振る舞われたことが、そのはじまりといわれています。小粒のだんごは、やわらかくてコシがあり、つるつるとした舌ざわりが特徴。味はあんこやみたらし、甘味噌などがあり、園内にあるお店で味わうことができます。

園内にある回遊式日本庭園「翠楽苑」。季節ごとに美しい表情を見せるが、一番のおすすめは紅葉の時期

中通り

三春滝桜

三春町

三春町観光協会
☎0247(62)3690

まるで桜の滝のような美しさ「日本三大桜」のひとつ

「梅」「桃」「桜」の花が一度に咲くことから、その名がついたといわれている三春町。この町のシンボルとして広く知られているのが、三春滝桜です。山高神代桜(山梨県北杜市)、根尾谷淡墨桜(岐阜県本巣市)と並んで「日本三大桜」のひとつに数えられているこの桜は、大正11(1922)年10月12日、桜の木としては初めて国の天然記念物に指定されました。樹高は13・5m、根回りは11・3mで、樹齢は1000年以上と推定されています。

4月の中旬から下旬にかけて、四方に伸びた太い枝には真紅の小さな花が無数に咲き誇り、水が流れ落ちる滝のように見えることから「滝桜」とよばれるようになったといわれています。その荘厳な姿は、見る人を魅了する美しさです。見ごろになると、午後6時から9時までライトアップされ、いつもとは違った表情を楽しむことができます。

ライトアップされた滝桜。太陽の下で可憐に咲き誇る姿も美しいが、夜桜にはまた一味違った魅力がある

会　津

五色沼

北塩原村

裏磐梯観光協会
☎0241(32)2349

磐梯山の噴火で誕生した色鮮やかな湖

明治21(1888)年、大噴火を起こした磐梯山。そこから崩れ落ちた岩石や土砂が、川をせき止めたことで誕生した沼です。正式名称は「五色沼湖沼群」といい、毘沙門沼、赤沼、みどろ沼、弁天沼、瑠璃沼、青沼などの沼で構成されています。

水の色は季節や天候、時間、見る角度によっても微妙に変化します。ひとつひとつの沼が違う色をしているのは、水の中に溶けている鉱物の種類や光の屈折率の変化、水中植物の影響などによるものだといわれています。

沼の周辺には、全長3・6kmの「五色沼自然探勝路」が整備されています。比較的平坦で歩きやすいこの散策路からは、エメラルドグリーン、赤茶、コバルトブルーなど、それぞれ色の異なる10あまりの美しい沼を楽しむことができます。

3つの美しい色に分かれた「みどろ沼」。その姿は、大自然という名のアーティストが生み出した芸術作品のよう

会　津

こづゆ

会津地方

会津若松観光物産協会
☎0242(24)3000

冠婚葬祭の席には欠かせない会津を代表する郷土料理

会津地方を代表する郷土料理のひとつ。江戸時代後期から明治初期にかけて、会津藩の武家料理や庶民のごちそうとして広まりました。手塩皿といわれる浅めに作られた、小さな朱塗りの椀に盛られることから「こじゅうのつゆ」、それが訛って「こづゆ」になったといわれています。現在は正月や節句、結婚式などをはじめとする冠婚葬祭の席で、必ずといっていいほど食べられる代表的なおもてなし料理です。

海産物が手に入りにくい会津という土地柄から、使われる食材は乾物が中心。昔はとても貴重だった「干し貝柱」でだしをとり、身をほぐします。地域によって若干食材の違いはありますが、豆麩、にんじん、里芋、干ししいたけ、こんにゃく、きくらげを入れ、日本酒と醤油でうす味に仕上げるのが特徴です。

7（または9）種類の具材の数は、奇数で縁起が良いことに由来しています。当時はぜいたくな食べ物でしたが、「最高のおもてなしをしたい」という会津の人情から、何杯おかわりしても失礼にならないという習慣が残っています。現在は、会津郷土料理の店などでも食べることができます。

会　津

にしんの山椒漬け

会津若松市

会津若松観光物産協会
☎0242(24)3000

先人の知恵が随所に光る会津ならでは「味」

家庭の味「こづゆ」と並ぶ、会津地方を代表する郷土料理のひとつ。にしんの背肉だけを取って乾燥させた「身欠きにしん」を、山椒と一緒に醤油と酢に漬け込んだのが、にしんの山椒漬けです。

材料となるにしんは、山国・会津では手に入らないため、江戸時代初期から新潟港を経由して運ばれていました。当時の会津の人々は、普段から生魚を口にすることが難しい環境であり、これが冬場になると、状況はさらに厳しくなっていました。そんな会津の人々にとって、にしんの山椒漬けは、厳しい冬を乗り越えるための保存食であり、冬場の山国・会津における貴重なタンパク源でもありました。さらに山椒を使うことで腐敗を防ぎ、その上にしんの生臭さを取り除いて、味にアクセントもつけました。先人たちの知恵には、本当に驚かされます。

この料理を作るために使われていたのは、専用の「にしん鉢」という陶器。地元の伝統工芸品である「会津本郷焼」で作られていました。郷土の伝統工芸品とのコラボレーションで生まれる「にしんの山椒漬け」は、それほど会津の人々に愛されているのです。

会　津

会津木綿

会津地方

「美しさ」と「機能性」両方を兼ね備えた逸品

会津地方の人々にとって、日々の生活に欠かせないものだった会津木綿。400年ほど前、領主・蒲生氏郷が産業振興のために綿花の栽培を奨励して、木綿を織らせたのがはじまりだといわれています。以来、農民だけでなく、藩士の妻なども内職として機織をしていたようです。

落ち着いた色合いで、素朴ながらも美しいしま模様が特徴。この模様は「地縞」とよばれ、地域によってしまの太さや色合いが異なります。これは布を染めるための植物や木の実が地域によって異なるため。地縞はいわば〝地域のユニフォーム〟のようなもので、今でも出身地の地縞にこだわりを持っている人もいます。

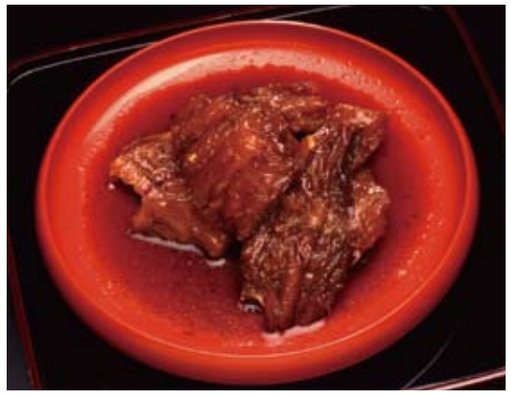
厚手で丈夫、肌合いが良く、保温性・保湿性・吸水性に優れているため、冬は寒く、夏は暑さが厳しい会津地方の人々の生活に欠かせないものでした。主に野良着や作業着として定着していて、八重や白虎隊もこの会津木綿の着物を着ていたといわれています。

着物以外にも財布やポーチ、ネクタイなどにも使われている会津木綿。「素材の良さ」を最大限にいかした作りになっている

会　津

棒たら

会津地方



「甘煮」で知られる会津の貴重なタンパク源

流通が発達していなかった江戸時代、内陸部の会津地方では、新鮮な海産物を手に入れることが難しかったため、保存性の良い干物をいかした食文化が発展しました。中でも「棒たら」は、会津を代表する保存食です。

会津地方の人たちにとって大切なタンパク源であり、雪によって流通が途絶える冬はもちろん、1年を通して日々の食事には欠かせない保存食であった「棒たら」。さまざまな料理として当時の食卓に並びました。有名なのは「棒たらの甘煮」です。

棒たらは非常に硬いため、下ごしらえには時間が必要です。まずは、身を柔らかくするために1週間ほど水にさらします。その後、水と砂糖、酒、醤油で煮込みます。煮る、冷ますを2～3日繰り返すことで、奥まで味がしみ込み、骨まで柔らかくなります。結婚式やお正月のごちそうとして、また茶会でのお茶受けとしても親しまれていました

身をやわらかくする以外に、一晩程度ではアンモニア臭を取り除くことができないため、1週間ほど水にさらす

浜通り

相馬野馬追

相馬・南相馬

相馬野馬追執行委員会
（南相馬市観光交流課内）
☎0244(22)3064

Copyright(c) The Executive Committee of SOMA NOMAOI All Rights Reserved

戦国時代へタイムスリップ
歴史が息づく伝統の祭り

１０００年以上の歴史を誇り、その伝統を今に伝える相馬野馬追。相馬中村藩の先祖とされる平将門が、原野に放してあった野馬を捕らえる軍事訓練と、捕らえた馬を神前に奉納したことに由来しています。

開催期間中、街は野馬追一色になり、戦国時代へとタイムスリップしたかのような雰囲気に包まれます。初日の総大将の出陣式を皮切りに、２日目の甲冑競馬、神旗争奪戦で祭りは最高潮に達します。法螺貝・陣太鼓が鳴り響き、腰には太刀、背中には先祖伝来の旗差物を身に付けた５００騎を超える騎馬武者たちが、打ち上げられた御神旗をめざし疾走する姿は、勇壮かつ豪華で見るものに感動を与えます。国の重要無形民俗文化財に指定されています。

Copyright(c) The Executive Committee of SOMA NOMAOI All Rights Reserved
打ち上げられた花火の中から落ちてくる御神旗を、騎馬武者たちが争奪する行事「神旗争奪戦」

会津

会津田島祇園祭

南会津町

南会津町観光物産協会
☎0241(62)3000

長い歴史と伝統を誇る祭事
「七行器行列」は必見

８００年以上の長い歴史と伝統を誇る祭りで、毎年7月22～24日にかけて開催されます。当番が毎年変わり、10年でローテーションする「お党屋制度」で神事がとり行われます。期間中は大屋台運行や神輿渡御、子供歌舞伎、太々御神楽など、さまざまな催しが行われます。

中でも、お神酒を入れた「角樽」を3つ、赤飯を入れた「行器」を3つ、鯖をのせた「魚台」を1つの計7つの器を神前に献上して、五穀豊穣などを願う祭りのメーン行事「七行器行列」は必見。未婚の女性が花嫁姿で町内を練り歩くことから、別名「花嫁行列」とも呼ばれています。

沿道には、毎年多くの見物客が訪れ、にぎわいをみせているこの祭事。昭和56（1981）年には、国の重要無形民俗文化財に指定されました。

屋台上で上演される「子供歌舞伎」。一時途絶えてしまったが、再び復活した

会津

七日堂裸詣り

柳津町

柳津観光協会
☎0241(42)2346

下帯姿の男たちが
幸福を願い綱をよじ登る

１２００年もの長い歴史を誇る会津の名刹「福満虚空蔵尊圓藏寺」で、毎年1月7日に行われる祭事。大鐘の合図とともに、下帯姿の男たちが会津の厳しい寒さをものともせず、招福開運・無病息災などを願いながら、本堂めざして１００段以上の石段を駆け上がります。その後、我先にと打ち綱をよじ登り、大鰐口をめざします。その昔、只見川に住む竜神から宝物を守ろうとした人々がたくさん集まり、竜神を追い払ったことに由来しています。

祭事が行われる圓藏寺は、大満虚空蔵尊（茨城県東海村）、能満虚空蔵尊（千葉県鴨川市）とともに『日本三虚空蔵尊』のひとつ。また福満虚空蔵尊は、丑寅生まれの守り神としても知られています。会津地方に伝わる「赤べこ」は、現在の本堂を再建する際、資材の運搬などを手伝った赤色の牛に由来しています。

吐く息も凍ってしまうような極寒の中、男たちは水を浴び身体を清め、次々に堂内へと進んでいく

会津

十日市

会津若松市

会津若松観光物産協会
☎0242(24)3000

４００年の伝統を誇る
会津最大の初市

会津で最も大きな初市で、４００年以上前から続いています。至徳元（１３８４）年、会津領主・葦名直盛が黒川城（後の鶴ヶ城）を築き、1月10日に市祭を開いたという説や会津若松の商工業の発展を奨励した領主・蒲生氏郷が始めたという説があります。

現在も毎年1月10日に開催されていて、出店数は４００店以上。店頭には、起上り小法師や色鮮やかな風車、市飴などの縁起物をはじめ、会津漆器や日用雑貨など、さまざまな商品が並びます。転んでもすぐに起き上がる起上り小法師は、縁起物として家族の数より1個多く買い求め、神棚に供えます。「家族や財産が増えますように」「厄を背負ってくれますように」という願いが込められています。素朴な味の市飴には、無病息災と家内安全を願います。

会場の神明通り・大町通りなどは、朝から晩まで多くの人でにぎわい、会津の新年には欠かせない風物詩として親しまれています。

愛らしい顔をした「起上り小法師」。倒れてもすぐ起き上がることから、縁起物として愛されている